

## 幕末明治の写真師列伝 第六十四回 内田九一 その二十九

主な内田九一の弟子としては他に、初代・市田左右太（石城、神戸）、葛城思風（大阪）、森川新七（神戸）、田村景美（大阪心斎橋）、大木宗保（東京深川）、後に実業界に転身した大井ト新、薛信二郎（長崎新町）（注1）、内田清介（注2）、新井八郎（注3）、飯岡仙之助（深香）、山際長太郎（心斎橋東）、長谷川吉次郎（東京）、古賀暁（浅草大代地、麴町平河町）、内田九一の従弟内田曾之助（大阪天満）（注4）、田井晨善（青森県弘前）（注5）などの名が上げられる。

養子の内田總一の方は、「おうた」と別れた後は、再び陸軍の軍馬医になって栃木、大坂などの勤務をしていたが、「おうた」を引取った当時は金沢鎮台の軍馬医として勤務していた。このため内田九一の写真術は金沢内田家には伝わらなかった。その後、大坂順慶町三丁目の店を廃業した「おうた」は、金沢の鎮台で勤務していた内田總一を頼って大坂から金沢に移り住んでいる。その正確な時期については不明ではあるが、明治27年（1894）12月18日に、「おうた」は隠居して内田總一が家督相続しているの、これ以前の時期であることは確かであろう。そして、この内田總一が養母の「おうた」を最後まで面倒みている。「おうた」は金沢で大正6年（1917）6月26日に亡くなった。そのため、内田九一の骨壺は、「おうた」と共に金沢の野田山墓地に葬られた。この内田九一と「おうた」の墓は、後に野田山墓地内の道路整備のためにその最初に墓があった場所は移転してしまったが、現在は野田山墓地内の別な場所にある金沢内田家の墓になる。「おうた」の法名は静室妙歌信女。このため内田九一の位牌も、金沢内田家の菩提寺である龍淵寺（金沢市泉野町三丁目）にある。

内田總一は明治37年（1904）6月8日、片桐ふじと結婚したが、ふじが明治44年（1911）10月21日に亡くなってしまったため、大正4年（1915）2月27日に、松倉儀兵衛、やをの三女、よしと再婚した。内田總一はよしと再婚したものの子供ができなかったため、大正5年（1916）2月19日に、親族の栃木県下都賀郡富山村の富田梅吉、タキの三男、豊咲（トヨサク）を自分の養子とし、この時、同時に富山県西砺波郡石堤村の山達恭素とまつゐの二女、巴を夫婦養子にしたが、これも世間ではよくあることではあるが養子を迎えたその年の九月に長男が生まれた。この養子の内田豊咲は内田總一の支援を受けて、金沢大学医学部の医者となった。そして、内田豊咲と巴の間には、その後、貞子（長女）、佐和子（次女）、一（註ルビ：ハジメ）（長男）、恒子（三女）、守（二男）の5人の子供が生まれた。内田豊咲の長男、一は、昭和19年7月24日、須田藤次郎、ひろの六女、富美子と結婚して豊（長男）ができている。一は、内田豊咲の願いで医者になることを目指したがなることができず、後に新興宗教に嵌ってしまい、家を出て神奈川県に移転した。一の子供は長男、二男、長女の三人おり、一の二男が現在でも金沢で「内田マタニティークリニック」の医者として勤務している。

内田總一とよしとの間には、大正5年（1916）9月3日に実子の長男が、大正9年（1920）10月2日には二男が生ま

れた。そして面白いことに内田總一は、自分の長男の名を九一、二男を十一と名付けている。二男の内田十一は、昭和12年（1937）4月6日に、母の実家である松倉儀助（よしの兄）、ちよし夫婦の養子となり、平成26年（2014）に東京杉並区で亡くなった。ご子孫には一人息子の松倉邦男がいる。

内田總一の長男、九一は、国鉄の通信関係の仕事をして、昭和15年（1940）、霊崎靈祐、環の長女、光子と結婚し金沢市泉旭町2丁目87番地に移り分家した。太平洋戦争終戦前の昭和20年（1945）5月9日、内田總一は亡くなる。法名は春岳禅道信士。總一の墓は野田山墓地内の金沢内田家の墓になる。昭和15年（1940）2月28日、九一の長男、一郎が生まれる。昭和18年（1943）9月9日、九一の長女、千代子が生まれる。昭和43年（1968）6月1日から12日まで東京池袋の西武百貨店で、明治百年を記念して日本写真家協会が企画主催した展覧会で「写真100年—日本人による写真表現の歴史展—」が開催された。その際に内田總一の長男、九一は、家に伝わる初代内田九一の肖像写真を提供し、この写真を元に作られた「内田九一自写像の掛け軸」が一般にも展示されている。昭和44年（1969）4月15日、内田一郎は中島英子と結婚。平成5年（1993）3月24日、九一は亡くなる。そして、石川県石川郡野々市新庄在住の内田一郎の家に、内田九一、おうたの肖像写真と共に「内田九一墓誌銅板」が伝わっていたのである。内田一郎氏の元には他にも内田九一使用と思われる古いカメラ機材なども以前には物置に残っていたそうだが、残念ながらそれらは全て処分されてしまった。

（注1）薛信二郎

弘化元年8月3日生、長崎唐通詞の裔、九一、東谷等に写真術を学び、後上野彦馬に師事、長崎市新町に写真館を開いた。上野写真館内に薛の写真研究所と称する建物が設けられていた時代もあり、相当彦馬について熱心に研究したらしい。明治42年9月16日逝去。

梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会、昭和27年）より

（注2）内田清介 内田九一の弟子の一人。内田という姓から内田九一の親族とも思われるが詳細は不明。

（注3）新井八郎 内田九一の弟子の一人と思われるが詳細は不明。

（注4）内田曾之助

内田九一の従弟、内田九一に従い写真術を学んだ。

『創業123年改革への道』（内田写真株式会社）参照のこと

（注5）田井晨善（市之丞）

弘前藩士。明治4年、弘前に写真館を開く。青森県人としては最も早い本格的な写真師であり、また最初の営業写真館を開いた人物。

『青森県の写真事始』（船水清著、昭和52年）参照。

（森重和雄）